文化交渉のダイナミズム

――あたらしくなったアメリカ展示

土人形（歯医者）
H0210115

アメリカ展示が変わるのは今回で三度目となる。一九八六年、それまで不足していた中米地域の資料収集が進んだことを受け、一部改編をおこなった。

二〇〇三年には、地域別展示を改め、文化を理解するための基本展示として「食べる」「着る」「祈る」の三つのコーナーをもうけ、さらに地域テーマ展示のコーナーをつくった。

今回は、地域テーマ展示を「創る」コーナーに改めた。そこでは、アイデンティティの表現を試みる作家たちの作品が展示されている。既存の「食べる」「着る」「祈る」のコーナーも手直しした。

インターネットの普及により、これまでの知のありかたが大幅に変わりつつあり、新しい価値が探し求められている。そのためには世界を多角的にみることも必要である。

カナダからアメリカ合衆国、中米、南米、カリブ海まで広くアメリカ大陸全体（アメリカス）における多様性と歴史を明らかにしようとするあらたなアメリカ展示が、その一助となることを願っている。

（八杉佳穂　民博 民族文化研究部）

「クランの移住神話」
H0268555

カーニバルの衣装
H0203720 ～ H0203724

トウモロコシ

出会う――異文化との接触と交渉

関雄二（せきゆうじ）　民博 研究戦略センター

唐突な出会い

アメリカ展示場最初のコーナーは、展示全体のコンセプトを語る「出会う」である。アメリカ大陸に人類が渡ったのは、今から一万四〇〇〇年前ごろともいわれる。以来、北半球の亜極地域から南半球の亜極地域にまで拡散した人類は、一五世紀の末になるまで、旧大陸とほとんど接触をもたぬまま、古代文明を含む独自の文化を築き上げた。その意味で、クリストバル・コロン（コロンブス）によるアメリカ大陸の「発見」は、この地で暮らす先住民にとっては、あまりに一方的な見方であるばかりか、ヨーロッパ人による植民地化によって、自文化を変容させざるをえなかった悲劇の意味合いが強い。

相互交渉が始まる

しかしながら、抑圧のベクトルは、あらたなものも生みだした。先住民は、植民地下、文明化と称して押しつけられた西洋起源の衣服に太古のむかしから育んできた技術を適用し、自らのアイデンティティをあらわす紋様を縫い込み、世界でも屈指の染織文化を築いた。また強制布教されたキリスト教を、自らの世界観の枠組みで組み替え、アメリカ大陸独自の宗教世界を創りだした。アメリカ展示場の新構築では、そうした人類史上まれな規模の成熟した文化同士の遭遇と、その後の相互交渉の過程で生み出された文化を紹介している。

この視線は、アメリカ大陸外部とのつながりにも向けられる。西洋基準の普及をグローバル化とよぶならば、植民地化のプロセスは、確かにグローバル化の先駆けともいえるが、その現象は一方向だけに作用したのではない。展示で示すように、旧大陸からもたらされたサトウキビの栽培は瞬く間にアメリカ大陸に広がり、世界的拠点となる一方で、トウモロコシ、ジャガイモ、サツマイモなどアメリカ大陸原産

祭壇「パチャママの門」H0210691

の栽培植物は、ヨーロッパ経由で世界中に拡散し、食卓の風景を変え、人類の飢餓を救った。

真剣勝負は続く

そして、現在、アメリカ大陸は、アメリカ合衆国に代表されるように、かつてないほどの速度をもって拡大する世界経済の中心のひとつであり、大陸の隅々にまでこの状況は波及しつつある。しかし、ここでもグローバル経済の作用は一方向ではない。情報メディアの発達は、たとえば、ペルー起源のチチャやテクノクンビアなど、都市に移住した先住民や混血メスティソが創った音楽の西欧進出を助け、また考古学者や人類学者が示す過去や現在の文化についての情報は、観光市場をにらんだ民芸品の創作の糧となることも珍しくはない。なかには西洋社会が産みだした美術市場に乗り出し、芸術家を名乗る者さえ登場してきている。

これもそれも、植民地化の試練に耐えながらも、生存を模索し続けることが可能なほど先住民が育んだ文化の蓄積が膨大であったがためであり、同時に変容を生み出すモデルとなるほど西欧文化の側にもパワーと魅力が存在したからである。この真剣勝負の文化交渉のダイナミズムを各展示コーナーから受け取っていただければ幸いである。

ワシの頭つき首飾り
H0219579

ウシの仮面
H0126922

宗教カレンダーから民族移動を見る

中牧弘允（なかまき ひろちか）　民博 民族文化研究部

日づけを語らない

「祈る」の空間には時間表象にかかわる三つの展示がある。ひとつは巨大な「アステカの暦石」、もうひとつは「アンデスの暦」、そしてあらたに加わった現代の宗教カレンダーである。

「アステカの暦石」には死滅した四つの時代や一周期二六〇日の暦法が絵画的に刻まれている。メキシコの国立人類学博物館を代表する展示資料（複製）であり、民博の開館当初からコロンブス以前のアメリカ文明を象徴してきた。

かたや「アンデスの暦」は二〇〇三年の展示リニューアルのときに初登場した。スペイン人がもち込んだキリスト教（カトリック）と先住民の信仰が融合した一二カ月の年中行事が造形化されている。それはコロンブス以後のアンデス社会がうみだした宗教変容を雄弁に物語っている。

しかし、両者とも暦と命名されてはいるが、日にちを知るものではない。アステカの時間観やアンデスの年中行事が表象されているだけで、日づけの点ではまったく役に立たない。

多様性を示す

今回、ようやく日づけのついたカレンダーが仲間入りした。とはいえ、年月日を示すのが主たる目的ではない。

ねらいは、特に二〇世紀以降、アジアや中東から仏教、ヒンドゥー教、あるいはイスラームなどの諸宗教がアメリカ大陸に伝播（でんぱ）した事実を示すことにある。キリスト教やユダヤ教だけでアメリカスの宗教を語るわけにはいかない。カレンダーは民族移動や宗教伝播をあらわす展示資料としてえらばれたのである。

新世界で競い合う

カトリック・カレンダーにはメキシコやブラジルのオーソドックスなもののほかに、シカゴ大司教区の発行した凝ったものがある。くわえて韓国系や日系の信者に向けたものがある。とりわけ日本人のブラジル移住一〇〇周年を記念したものは、出移民を出エジプトになぞらえるなど、移民の歴史を聖書の聖句で意義づけたすぐれものである。

プロテスタント・カレンダーとしては米国のラジオ伝道のものと韓国系メソディスト教会のものを選択した。前者は、旺盛な宣教精神とそれをささえる支援者の存在に、後者は米国における民族教会としての役割にそれぞれ注目したからである。

太平洋を越えて米国に渡った移住者集団には中国人やインド人も含まれる。中国系雑貨店が作成し顧客に配ったものには干支（戌（いぬ））のモチーフがあり、「福」の字が添えられている。太陰太陽暦（中国の農暦）の日づけもついている。かたやインド系の商店で配られていたのは商売繁盛や知恵の神としてあがめられている象のガネーシャを図案化したものである。

他方、日本の宗教カレンダーにはひと月分の日めくりが多い。年一二回同じ文言をながめ、教祖の教えをありがたく味読することに重点が置かれている。これは日常の生活倫理が日系宗教のひとつの魅力であることをうかがわせる。

このように新世界のアメリカスには今やアジア系の宗教が渡来し、大西洋を渡った先着のキリスト教などと、しのぎをけずるようになっているのである。

中国系アメリカ人の顧客向けカレンダー
H0268826

カトリックの日伯司牧協会が発行したカレンダー

イヌイット・アートと著作権

岸上伸啓（きしがみ のぶひろ）　民博 先端人類科学研究部

イヌイットは一九四〇年代末に石製彫刻の制作をはじめ、一九五〇年代末には版画の制作を導入した。極北地域の動物の姿、イヌイットの伝統的な生活や世界観などを描いた、「イヌイットらしさ」が伝わる作品が制作され、現在ではイヌイット・アートとして知られている。

予期せぬ問題

イヌイットの作品は民族学博物館で展示されることが多かったが、一九八〇年代になると欧米の美術館による収集と展示がはじまった。これはアートとして認められたことを意味し、作品の価格が上昇するとともに、その取扱いも美術品と同じようになった。その結果、われわれには予期せぬ問題が発生した。

カナダではアート作品には展示権と著作権が存在し、それらを展示する場合や出版する場合には、博物館や美術館の所有物であっても原作者の許諾が必要になっている。日本でも民族学資料であっても特定の作家がつくったアート作品である限り、その写真の利用に際しては著作権の処理が不可欠と考えられるようになった。

「魔法をかけられたフクロウ」（ケノジュアク・アシェバク作、1960年）
写真提供：ケープ・ドーセット美術

苦労の末に

今回の新構築や二〇〇九年度民博特別展においてイヌイット版画を出版したり、展示で写真を利用したりするために、作家自身もしくは関係者から許諾をとる必要が生じた。このため、作家や、亡くなった作家の家族を探し出し、連絡をとるなどしたが、大変に煩雑で、骨が折れた。その一方で、見知らぬ作家やその家族との接触を試みたことによって、彼らの作品がわたしにはより身近なものになったような気がする。

許可なく撮るべからず

伊藤敦規（いとう あつのり）　民博 文化資源研究センター

猛暑の大阪から

二〇一〇年夏、大阪は記録的な猛暑となったが、米国南西部は比較的涼しく、深夜近くにアリゾナ州フラッグスタッフの空港に降り立ったときには鳥肌が立つほど肌寒かったと記憶している。

二〇〇三年以来九度目となった米国先住民ホピの保留地訪問の目的は、民博のアメリカ展示新構築のための資料収集であった。それまでも、そこに暮らすアーティストやギャラリー経営者から話を聞かせてもらったお礼に、作品を購入することは何度もあった。そのため、宝飾品の購入自体は、それほど大変な任務とは思っていなかった。ところが、今回の訪問の目的である資料収集は、単にモノとしての宝飾品収集だけを意味したわけではなかった。素材購入から完成までの一連の作品制作のプロセスを、映像資料として記録することがもうひとつの目的だったのである。

不安を抱きながら

米国先住民に限らないが、先住民一般を学術調査の対象と設定する場合に、さまざまな制度的な難しさがあることはよく知られている。今回の資料収集についても同様で、展示・公開を前提とした映像資料の撮影が決まってからは、被写体となるアーティストだけではなく、彼が属する村落の指導者と、ホピ・トライブ政府の文化行政担当である文化保存局からの調査・撮影許可の取得に向けた交渉を繰り返すことになった。

そもそも米国南西部の先住民の多くは、保留地内に点在する村落の屋外での写真・ビデオ撮影、スケッチなどあらゆる記録行為を禁止している。特に仮面儀礼がおこなわれているときには、宗教結社の成員が観光客などのよそ者の行動に監視の目を光らせる。幸い、宝飾品制作プロセスは工房内での撮影が可能であるため、アーティストと村落の指導者からはメールでの数回のやりとりで撮影の許可が下りた。ただし、トライブ政府の担当者との事前の交渉はそれだけでは済まず、撮影目的等の説明を伴う政府機関での面談が条件とされた。フラッグスタッフから一五〇キロメートルほど離れた保留地へと車を走らせているときも、不安が消えることはなかった。被写体となる予定のアーティストのフォローもあり、一時間ほどの面談の後にトライブ政府づけの期間限定の「調査（ライセンス）・撮影許可証」が発給された。

今回の資料収集で取得した、
調査・撮影許可証と資料の展示等に関する同意書の数々

ふり返ってみると

本館展示場で流れている制作工程の映像や情報端末による作品解説などは、長期間におよぶ交渉の賜物（たまもの）でもある。今思い返すと、近郊都市の空港に降り立ったときに感じた肌寒さは、いよいよ直接交渉の日が近づいたことへの緊張のあらわれだったのかも知れない。

「クランの移住神話」（H0268555）を制作する
ホピのジェロ・ロマベンティマ氏

時代を記録するやきもの

齋藤晃　民博 先端人類科学研究部

古代のやきもの造りの再興

チュルカナスのやきものは、一九七〇年代にペルー北部ピウラ県チュルカナス市で誕生した新しい工芸品である。しかし、制作者組合の作品紹介や販売業者の商品宣伝では、ペルー北海岸の古代文化、とりわけビクス文化（紀元前後～六〇〇年ごろ）との連続性が強調されている。実際には、この連続性は一九世紀中葉に作り出されたものである。

甕（チチャ売り）
H0205415

もともとピウラ県には、チチャ（トウモロコシの醸造酒）の生産や運搬に使われるやきもの造りの慣行がふるくから伝わっていた。一九六〇年代初め、ビクス土器の出土を契機として、若い陶工のあいだで古代の制作技法や装飾モチーフを取り入れた新しいやきものを造ろうという気運が高まった。当時、診療所の看護婦を勤めていた米国人修道女グロリア・ジョイスが、北米先住民の美術やアンデス考古学の知識を彼らに伝え、創作活動を支援した。一九七〇年代には「サニョ・カマヨク」（やきもの師）というグループが結成され、そのメンバーのひとりヘラシモ・ソサがビクス土器の装飾技法を再現することに成功した。これにより、チュルカナスのやきもののスタイルが確立した。

「今」を伝える

チュルカナスのやきもの成立のプロセスには、相互に関連する一連の変化が積み重なっている。

①古代土器の出土を契機とする地域の歴史の創作。ビクス土器の制作者が現代のピウラの人びとの祖先とみなされ、そこから、失われた祖先のやきもの造りを再興しようとする運動が生じる。

②他者の視点の内面化による自画像の構築。地域の自然や人間の暮らしが文化や伝統とよばれる有機的総体とみなされ、その総体が近代化や西洋化により失われつつある真正な世界のありようと理解され、保護や救済の対象となる。

③日用品の民芸品への転換。チチャの生産や運搬に使われていたやきものが、実用性を失って装飾・観賞用の作品になるとともに、地域の文化や伝統を体現する民芸品へと変貌する。

やきものの制作者自身はこのプロセスをどのように認識しているのだろうか。ヘラシモ・ソサは、自分の作品の風物描写をビクス土器の動物像や人間像と比較して、やきもの造りはドキュメンタリーの一種であると述べている。彼によれば、やきもの師のつとめは、むかしも今も、自分が生きる時代を記録することなのである。つまり、ビクス土器が古代の自然や人間の姿を今に伝えているように、チュルカナスのやきものも、やがて消滅するだろう現代のピウラ県の風物を後世へ伝えていくのである。

土人形（チチャ造り）
H0210591

背景：土人形「豊穣」 H0210476

名人の看板

鈴木紀　民博 先端人類科学研究部

出会いは一〇年前

新しい展示を準備するにあたってわたしが思い浮かべたのは、メキシコのオアハカ州で制作されるアレブリヘだった。それは二〇〇一年の夏以来わたしの瞳に焼きついている。州都オアハカ市の近郊にあるサン・バルトロ・コヨテペック村の資料館を訪問した際、明るい日が差すパティオに置かれた不思議なオブジェが目にとまった。アルマジロの木彫で、甲羅と尾はグレー、胴は水色で彩色され、ユーモラスな形が印象的だった。その日の午後オアハカ市にもどって民芸品店を覗くと、たくさんのアレブリヘが売られていることに改めて気がついた。カラフルな装飾をほどこされた動物たち。愛嬌ある表情。アレブリヘとは「空想的な生き物」の工芸品のことである。

木彫（アルマジロ）H0268544

マンダリン氏の玄関に掲げられていた看板。
現在はアメリカ展示場に展示中　H0268529

雰囲気を出したい

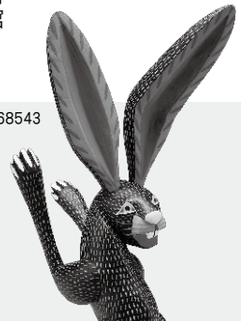
二〇〇九年、民博にアレブリヘを展示することが正式に決まり、資料収集のため同じオアハカ州のサン・アントニオ・アラソラ村を訪問した。ここはアレブリヘの里として知られており、作家の工房の前にはそれとわかる看板が掲げられていた。木彫同様どの看板も個性的で、村全体に創造的な雰囲気があふれていた。なんとかこの感じを民博の展示場でも再現できないだろうか。そう考えてわたしは、木彫だけでなく看板も集めることにした。

看板を下ろさせる

アントニオ・マンダリン氏はこの村で名人と目される作家の一人である。彼の評判はオアハカ州立民衆芸術美術館館長のカルロマグノ・ペドロ氏から聞いていた。マンダリン氏の家は村のほぼ中央にあり、眺めのよい工房からは、サポテカ族の山上遺跡モンテ・アルバンが手にとるように臨める。彼の作品もすばらしかったが、わたしが気に入ったのは看板の方だった。ARTESANIAS MANDARIN（民芸品マンダリン）という文字とともにアレブリヘの典型的なモチーフであるドラゴンが描かれている。しかも薄い金属性で、展示するには手ごろな大きさだった。さっそく交渉に入った。人のよいマンダリン氏は、最初は当惑ぎみだったものの、看板を売却することに同意してくれた。問題は金額である。わたしも彼もまるで見当がつかない。わたしはためしに思いついた額の半額をいってみた。彼は無言。どう返事したらよいか困っているようだった。そこにすかさず割って入り、その五割増しの値段を主張したのは、しっかり者の彼の奥さんだった。交渉成立。わたしも収集予算を有効に使えた気がして満足だった。

けっして無理強いしたつもりはないが、よく考えると、わたしは名人の看板を下ろさせたことになる。マンダリン氏が看板を新調し、ますます円熟した作品を生み出していくことを願ってやまない。

アントニオ・マンダリン氏と彼の作品



木彫（ウサギ）H0268543